

はじめに

去る 12 月 13 日、千代田区神田の東京都中小企業振興公社にて、夕刊フジの記者で千葉県香取市佐原の出身の久保木善浩氏、佐原囃子の篠笛奏者の久保木智康氏をゲストに、「江戸の祭りを後世に～東日本大震災を乗り越えて...」というタイトルの下、講演を聞いた。

佐原のおまつりってどんなおまつり？

佐原のおまつりは昨今増えている神輿祭りではなく、山車祭りである。町内毎にある山車を、大勢の人で押したり引いたりする人がいて、山車の中にはお囃子を演奏する人が 15 人くらいといった構成で進行をしている。お祭り毎に 10 台くらいの山車が出ており、山車の上には人形が乗っている。この人形、今では作り替えるための腕のいい人形師がいないので、昔からあるものを使い回しているという。こういったけやきの造りで重さ 4 トン、長さは最大で 4 メートルある山車を、佐原の江戸っ子風の小さい道を夜の 10 時くらいまで回っていく。そして今日本中にある迫力満点、粋で楽しんでもらうものではなく、哀愁を帯びたお囃子で割と静かな感じで、じ～んとくるというのが佐原のおまつりである。

佐原のお囃子の特徴

佐原のおまつりは佐原のお囃子を聴いてもらうための舞台である。佐原のおまつりにおけるお囃子は、山車や踊りよりも比重を置かれることが分かる。このお囃子、他のおまつりと比べると幾つかの特徴がある。先ず一つは「ギャラが発生する」ということ。個人に発生する訳ではなく、1 町内毎に 1 日当たり 100 万円が支払われるのだが、この内 6 割がお囃子の維持管理費に費やされている。お囃子に比重を置いている分、お囃子に多くのお金がかかる。道具の購入費等々、多額のお金が必要とされるため、如何に町の人から寄付を集めるかという点も大事になってくる。また場面によって音楽が変わるのも特徴的であり、グループによっては 40 曲も用意しており、その時々、山車を回転させる時には調子をつけた曲を流す...、といった組み合わせがあるという。しかしそのお囃子組、プロなのかアマなのか分からないともいう。プロとアマの間という解釈もできるが、そこはかなり曖昧のようだ。だがお祭りの期間ギャラを貰って活動している以上、中途半端なことではできないので、毎週土曜日には 2 時間以上みっちり練習を重ねているそうだ。

お囃子の伝承

おまつりの主体となっている町とお囃子は別になっており、町からお囃子をやってくれという依頼をされるのだという。お囃子の練習をしている所に町の人がやってきて、杯を交わしながら話し合う。お祭りになると真剣勝負になるので、お互いを知りながらお酒を飲むという貴重な機会なのだそうだ。

このおまつりには子どもも参加している。夜の練習の際にはお菓子が貰えることや、夜遅くまで友達と一緒に居られることもあり、沢山の子どもが練習をし、いつの間にか踊りを覚えるまでに至っている。踊りに参加するだけではなく、小中高の学校ではお囃子の部活があり、実際に活動している人達が学生相手に指導をする。単なる技術指導ではなく、伝統の継承、すなわち伝統芸能を大切に作る心、如何に道具を大切に作る心があるかというところを指導している。

まとめ

日本はいま、経済低迷、人口減少、情報発信が、全国共通で抱える大きなテーマである。どこの自治体でもお金がない状態で人口を誘致することもできず、それが情報の未伝達にも繋がってしまい、ますます疲弊していつてしまう。そういった中で佐原という町は、たくさんの魅力的な要素をもっているながらも、まさに情報発信、私達のまちはこういったところがいいですよ、ということを送達できていないことから、お祭りの時以外に町に人呼ぶことができていない状態である。

これから情報の発信先として、海外という選択肢もインターネットや大交流の時代にはある。多様な範囲で情報を伝え、佐原のを魅力的に見せていかなければ、いくらお祭りだけあってもそれ以外の時に人がこなく、経済の低迷は打破することはできない。大きなテーマを克服し、佐原のまちがもっと元気になることが望まれる。

感想

子どもが楽しそうに練習やおまつりに参加している様が非常に印象深かった。私の近隣のお祭りは基本的に町内会が主導で行っており、加えて神輿祭りばかりなので子どもが参加できる余地がどうしても少ない。山車祭りだと踊りも入ることもあり、子どもも参加しやすく、加えて佐原のおまつりはお囃子の指導を小中高という学生に対しても指導を行っていくので、将来地元に戻ってくるのかどうかはともかく、技術継承はしっかり行っているプロセスが構築できていることに感心した。

しかし佐原のおまつりそのものに対しての情報は、何度か訪れた際には分かったことがあったものの、技術継承に関しては今回のお話で初めて知ったことが多く、今後こういった情報が色んなところに流れていくことが、佐原の発展に繋がっていくのだろう。東日本大震災の被災地である佐原に、土蔵のまちなみに人が溢れ返る姿がくるのが待ち遠しい。